Euro-NARASIA | SERIAL REPORT〈第十七回〉

飛鳥・奈良と「汎ユーラシア」のイラン文化

20 長安（西安）・その1

青木健 AOKI Takeshi

２０１７年８月15日、敦煌空港を飛行機で出発した後は、甘粛省の武威や蘭州を飛び越えて、シルクロードの東のターミナルである長安（明代以降は西安と改称）を目指した。当然、時系列としては、２０１７年８月16日以降を描かねばならない。しかし、筆者は２０１９年７月にも西安を訪問しており、こちらの機会にも西安の断面を知る貴重な経験を重ねた。そこで、本稿では、２０１７年８月と２０１９年７月の２回の西安訪問の経験を、必ずしも時系列に沿わずに挙げる形で、西安の風景を素描したい。

20-1．西安の印象

２０１７年８月の初めての西安訪問の際は、西安の街や人々に関する印象は殆ど残っていない。この旅（『ユーロナラジア』第16号以降に所収分）は、初日からアクシデントに見舞われて日程変更が相次ぎ、ゆっくり現地を観察するには忙しすぎた。日程が押し詰まり、西安滞在は1日だけとあっては、この街の印象を論じることは不可能である。

一つだけ申し述べておくとしたら、甘粛省から陝西省まで飛んだ際に、機上から見る景色の違いが印象に残った。窓から見下ろす河西回廊は、江南とは似ても似つかない満目百里荒れ果てた山河であった。新疆のゴビ灘とも、鳴沙山の沙漠とも違い、起伏に富んだ乾燥した台地である。中国語の中には、こういった地形を細かく表現する単語があるのだろうが、私の日本語語彙ではどうにも形容できない。ところが、陝西省に入ると、大陸の赤い夕日の中、関中盆地の満緑がこれに色を添えており、渭水の流れの偉大さを思った。

これに対して、２０１９年７月の西安訪問に際しては、多少日程に余裕があり、地元の人々との交流の機会を持てたので、こちらの方が西安の第一印象に近い。この季節の西安空港は、海外へ修学旅行に行く西安の小学生の団体でごった返していた。この部分、間違いではない。「小学生」が「海外」へ修学旅行に行くのである。しかも、その行き先は、多くの場合日本となっていた。地元の人によると、西安は東南沿海部の上海や香港に比べて、国際交流の面で大幅に遅れをとっているとの自覚があるから、敢えて小学生を積極的に海外に送り出し、それを補っているとのことだった。内陸部の西安人の意識が、海外に向かって開かれている点には、人の流動性の高さや開放性を感じた。まさか、10世紀以前、シルクロード全盛時代の長安の気風が今も残っているわけではなかろうが。――それを言うにしては、中国史はあまりにもダイナミックで、民族移動が激しい。

到着初日の夜には、西安人と会食する機会があった。筆者が見た限りでは、西安には高層ビルが乱立し、上海や香港に劣らぬ経済発展を遂げていると思った。しかし現地人によると、実情は全然違うらしい。現在のグローバル経済の中では、貿易に有利な東南沿岸部に富が集中しており、内陸部の西安は、上海、杭州、広州、香港などに比べて工業設備の立地条件が悪過ぎるそうである。他国や他地域への輸送コストが足を引っ張り、国際的な投資は全く西安に集まらない。説明会を開催しても、逃げていく企業ばかりらしい。西安の唯一の強みは、東南沿岸部に比べての人件費の安さで、これを頼みに政府の投資によって生き長らえている「西北五省区の最大都市」だと聞いた。

筆者はこれを伺って、アメリカのラストベルト地帯を思い出した。アメリカでも、東部と西部の沿岸部に富が集中し、五大湖周辺や中西部が寂れている。真面目に働いても報われないアパラチア山脈一帯の白人労働者層が、トランプ前大統領の支持基盤と聞く。――そんな話題を持ち出してみると、筆者が知り合った西安人は、トランプ前大統領への熱烈な支持を表明した。「あのように国家の利益を守る人物こそ、真の指導者だ」と云う理由である。筆者としては、産業構造が似ているアメリカの内陸部と中国内陸部の人々のメンタリティーが、相似形なのかも知れないと思った。ついでながら、日本の安倍元首相の評判も実に良かった。西安まで来て、到着早々、「日本の安倍首相こそ真の国家指導者だ」と云う言説を聞こうとは・・・あれは絶対にお世辞ではなく、心からそう思っているに違いなかった。

20-2．長安城のゾロアスター教拝火神殿と城隍廟火神殿

さて、西安に於けるイラン文化の調査である。唐代長安城には、文献上で確認される限り、6箇所にゾロアスター教拝火神殿が建立されていたとされる。左記の地図の●印の点が、その地点に当たる。一見して明らかなように、ソグド人商人が集住していた西市周辺に5箇所が集中し、1箇所だけ廷臣たちが住む東側地区にも存在している。

２０１９年７月の西安訪問の目的の一つは、この6箇所を訪問し、周辺の宗教施設を実見することであった。無論、筆者が如何に楽天的であっても、7～10世紀に建てられたゾロアスター教拝火神殿が今に残っているとは考えられない。西安に今も残る唐代の建築物は、大雁塔だけの筈である。しかし、民間信仰のような形で、ソグド人が齎した拝火信仰が残存している可能性を想定したのである。現に北宋代の記録によれば、開封（北宋の首都）や鎮江（長江下流域の商業都市）で、漢化した拝火神殿が道教寺院に転じ、「火祆廟」として機能していたとの中国語論文を読んだことがある。

これらの拝火神殿跡地のうち、2つは比較的容易に位置を特定できた。2つとも、労働南路と豊慶路の交差点である。現代では高層ビル群の一角に過ぎず、殺風景な近代的光景の中に埋もれていた（写真1参照）。残る4箇所については、正確な場所を特定できず、「概ねこのあたりではなかろうか」と云う曖昧な推測に終始せざるを得なかった。

而して、この調査中、筆者が興味を惹かれたのは、上記のゾロアスター教拝火神殿跡地に程近い西安西大街の城隍廟である。城隍廟については、2016年3月に福建省霞浦県で摩尼教村を調査した際に、現地で少し

唐代長安城ゾロアスター教拝火神殿の位置
（出典『ニューステージ世界史詳覧』浜島書店2021年）

写真1：西安のゾロアスター教拝火神殿の跡地（筆者撮影）

調べたことがあった。これは、中国大陸で各都市を守護する城隍爺を祀る廟を指し、概ね一都市に一つある。道教神としての格は高くはないが、それ故に、漢化したマニ教が土俗的な城隍廟信仰と習合した可能性を考えたのである。そして、同じことを西安でも反復して考えた。――思考に根強い反復傾向が見られるのは、筆者が老化している証拠かも知れない。

西安ほどの大都市になると、城隍廟には複数の道教神が祀られており、それに伴って敷地内に複数の廟が乱立状態を呈している。それらの中に、主神ではないものの、陪神を祀る為の「火神殿」が設置されており、読んで字の如く、確かに火の神を祀っていた（写真2参照）。筆者としては、「ロケーションといい神格といい、これはもしや唐代ソグド人のゾロアスター教信仰が、道教に吸収されて生き延びたか？」との仮説を想定せざるを得なかった。

20-3．西安城隍廟火神殿の検討

しかし、これはあくまで可能性である。10世紀にこの周辺に存在したであろうゾロアスター教拝火神殿と、21世紀の現在ここにある西安城隍廟火神殿の間には、1000年以上の時間が流れている。両者を安直に結び付ける訳にはいかないであろう。

先ず、ここに祀られている「火神」とは何であろうか？　中国宗教の専門家の間では既知の話柄に属するらしいが、ここに纏めておきたい。筆者が目を通したのは福建省の火神廟に関する文献であって、地理的にかなり隔たっている陝西省では事情は違うのかも知れない。しかし、少なくとも福建省で「火神」と云えば防火の神であって、火を神として崇めるゾロアスター教のコンセプトとはかなり隔たっている。この場合、「火神」は火を司る神であり、それへの祈りはまず防火、次に消火である。因みに、10世紀の福建省にマニ教を齎した（とされる）人物も、福州の大火の際にこれを鎮火した功績で神として祀られていた。となると、火を神聖視して祀るゾロアスター教と、防火の為に火を管理したい火神崇拝

写真2：西安の城隍廟火神殿

写真3：西安の城隍廟案内板（筆者撮影）

では、根本的に方向性が異なるだろう。念には念を入れて、西安出身者に「火神殿には、どういう時にお参りしますか？」と尋ねたら、「防火を祈る時と、近くの回民街で遊びたい時に立ち寄ります」との答えで、およそ熱烈な信仰対象とは言い難かった。

次に、この城隍廟の歴史を調べると・・・と言っても、現地の観光案内板を読むだけなのだが（写真3参照）、それによると、本来この城隍廟は、１３８７年に新城区東門内の九曜街に建設されたものが、１４３３年に西大街に移転したらしい。残念ながら、本来の立地点たる九曜街は、唐代ゾロアスター教拝火神殿とは全く無関係な場所である。これでは、ロケーションの一致との主張は裏付けられない。しかも、どう頑張っても、西安城隍廟は洪武帝の時代までしか歴史を遡らないようである。それ以前には、あったのかも知れないし、無かったのかも知れない。何か遺物が残っていれば手掛かりになるのだが、この西安城隍廟は、１８８７年に火災に遭い、１９４２年には日本軍によって破壊され、文化大革命中には紅衛兵によって破壊されたとある。何をどう立証しようにも、古いものは殆ど残っていないらしい。――観光案内板如きによってあっさり否定されるとは、いつもながら私の思いつきは滅多に実を結ばない。通算すると、打率は1割を切っているだろう。研究者としての着想力に問題があるのかも知れない・・・などと悩む日々である。

20-4. 西安の「中華ハラール料理」

西安城隍廟火神殿の研究は諦めて、近隣の回民街について触れておく。西安での食事は、主に回民街で摂った。筆者は、大学ではイスラム学科と云う変わった研究室を卒業しているから、少なくとも出発時点ではイスラーム学者である。目の前に「回民街」などという表示があったら、とりあえず覗いてみたくなるではないか。

回民街での食事と言えば、当たり前のようにハラール料理（イスラーム教徒の戒律に即した料理）であり、西安で回民料理と言えば、最近東京でも見掛けることの多くなった蘭州料理に指を屈する（あくまで筆者の主観である）。これは、上海や福建などの漢民族居住地帯でも「清真菜」との看板の下に良く出されている料理で、地元のイスラーム教徒たちがよく利用している。

筆者が深い感銘を受けたのは、新疆ウイグル自治区までとは違い、ここ西安では、中華料理とハラール料理が巧みに融合し、回民料理が中華料理としてもハラール料理としても成立している点であった。例えば、蘭州牛肉麺である。粉食文化の本場たる北方の中華料理だけあって、当然麺である。しかし、中央アジアのラグマンとは異なり、混ぜ麺ではなく、あくまでスープ麺である。

そのスープは、中華料理に欠かせない豚肉を避け、敢えて牛肉を使用している。本来は牛肉スープだから「牛肉麺」と名付けられたらしいが、現在では牛肉入りの意味も含まれている。いずれにせよ、豚肉を食べられないイスラーム教徒への配慮である。そして、薬味として激辛香辛料を加えるのだが、これはきっと前々号で紹介した敦煌の激辛料理文化の影響に違いない・・・と思う。

蘭州料理と云う以上、甘粛省の料理である。河西回廊にいつイスラーム文化が伝来したのかは不明だが、少なくとも新疆でイスラームを受容した最初の支配者、カラ・ハン朝のサトウク・ボグラ・ハーン（９５６年没）以降に定着したと考えられる。とすると、多く見積もった場合、甘粛省にイスラーム文化が伝来してから１０００年程度が経過している。その時間の経過の中で、中華料理とハラール料理を融合させた「中華ハラール料理」が完成した訳である。

筆者は、ハラール料理が現地の料理に上手く溶け込んで、両義性を持つようになった実例を殆ど知らない。トルコ系のガストアルバイターが多いドイツでは、確かにケバブ店が多いものの、それが伝統的ドイツ料理と融合しているかと云うと疑問である。東南アジアのイスラーム教徒観光客を誘致している日本でも、ケバブを丼物にしたケバブ丼がある程度である。これが今後どう発展していくかは予断を許さないが、日本にハラール文化を根付かせる為には、ゼロベースで和風ハラール食を開発するよりは、お隣の中国で既に完成の域にある「中華ハラール料理＝蘭州料理」を参考にアレンジした方が、随分と効率的なのではないか。――そんなことを、西安の回民街で考えた。これも、シルクロードを東進して来たイラン文化の一齣である。

あおき・たけし
1972（昭和47）年生まれ。東京大学文学部イスラム学科卒業後、同大学大学院人文社会系研究科アジア文化専攻博士課程修了、博士（文学）。現在、静岡文化芸術大学・文化芸術研究センター教授。『ゾロアスター教史』（刀水書房）、『マニ教』（講談社選書メチエ）、『古代オリエントの宗教』（講談社現代新書）など著書多数。